

赤兎山の自然

小林 則夫

1. はじめに

近年、高度経済成長による地域開発・林道開発・森林開発によって、自然破壊が極度に進み、自然界のバランスがくずれかけている。5～6年前より自然保護が叫ばれつつあることは大変うれしいことである。

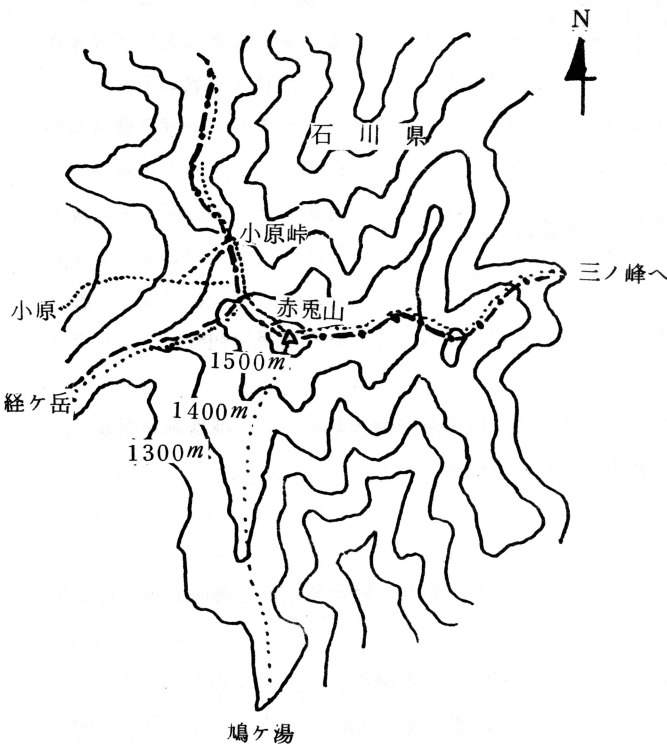
この福井県でも自然開発が進み、海拔900m以上のブナの原生林まで伐採が進んできた。現在原生林のままに残されている所は、大野市の赤兎山周辺だけであろう。

赤兎山は第1図のように、石川県と福井県の境界にそびえる山で海拔1628.7mである。行政区から見れば大野市に属している。この山の周辺は海拔1400mぐらいから原生林で、多くの自然林が残っている。

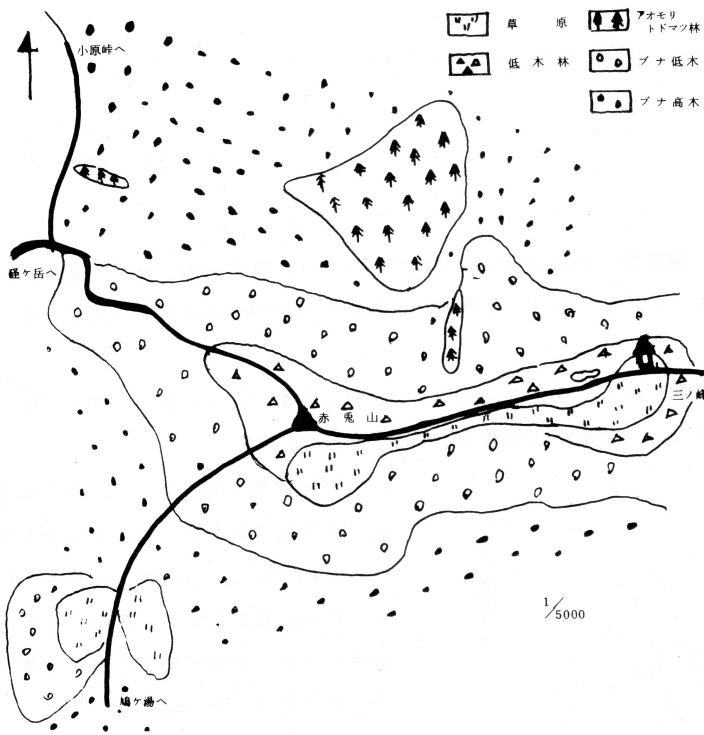
この山の開発は福井国体を契機として、山岳道路がつき、それまで人々をよせつけなかった赤兎山が多くの人々の目にとまり近年脚光をあびつつある。それは梅雨期のニッコウキスゲの満開と秋の紅葉が大変美しいからである。

しかし、この山も小原峠附近と小池附近との林道開発によって、次第に森林伐採が進み、原生林が残り少なくなってきたことが大変残念なことである。何とかこのままで保護したいものである。

筆者らは昭和45年から何回となく調査に訪れ、いくつかの新事実を見つけたので、ここにその調査の概略を報告する。



第1図 赤兎山附近の略図(1/5万)



第2図 赤兎山周辺の植生概念図

2. 赤兎山附近の植生

赤兎山附近の植生概念図は第2図のようである。この附近の植生を大きく分けると4つのタイプになる。

- (1) ブナ林
- (2) アオモリトドマツ林
- (3) 草原
- (4) 低木林

山頂にはブナ林はなく、風によって小さくなったブナが少しあるだけである。山頂から谷へ向けて下るとブナの背たけがどんどんのびて大きなブナ林を形成している。

アオモリトドマツ林は赤兎山の山頂より石川県側に少しさがった平地に広がっており、夏には目立たないが、春・秋には特によく目立っている。

低木林は山頂を中心とした尾根に広がっている。その山頂より大野側の南東斜面にはニッコウキスゲの草原がよく発達している。

山頂より三ノ峰への道を少し進むと平地があり、そこに小さい池がある。この池は高層湿原で広さは20 mあり、夏でも深さ約30 cmの水をたくわえている。

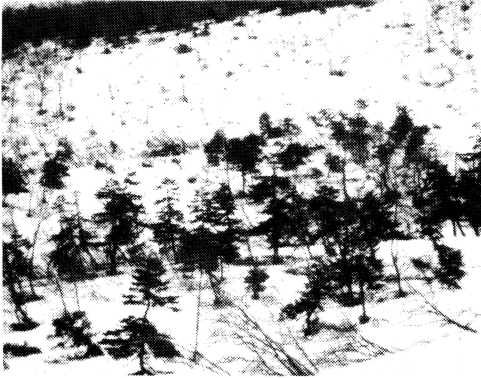
3. 山頂附近の植物（低木林）

山頂附近は風が強く、樹木は大きくなれず全て矮小化しており、階層構造は2層にしか分化していない。

上層にはチシマザサ、アカミノイヌツゲ、オオコメツツジなどが多い。ハナヒリノキ、ツノハンバミ、ミネカエデ、ハイヌツゲ、オオバスノキなどが少量生育している。このような低木の中にブナの小さいのが時々生育している。これらの低木は背たけが約1 mの高さで、視界をさまたげるものがなく、白山・経ガ岳の全容がよく見えてすばらしい。

下層にはミヤマカンスゲ、ミツバオウレン、ホソバトウゲシバ、ハイヌツゲなどが多く生育している。ツルシキミ、ゴゼンタチバナ、マイズルソウなども少しではあるが生育している。ツルリンドウ、チゴユリ、ニッコウキスゲ、アクンバ、アキノキリンソウなども所々に生育している。

下層の植物はブナ林とよく似ているので、強風によってブナが矮小化してしまっていて形成されたものと考えられる。



4. アオモリトドマツ林の植物(写真1)

昭和49年の早春、残雪の赤兎山に登り発見したもので、山頂より石川県側へ少し下がった平地に群落を作っていた。

アオモリトドマツの樹高は約8mで、少々くぼんだ風当りの少ない所によく生育している。しかし尾根近くに生育しているものは、先が枯れてしまっていた。

樹高が低いため階層構造は明白ではないが、ほぼ4層を認めることができた。

第1層(高木層)に多い樹木としては、アオモリトドマツが一番多い。その中に少しではあるがブナとダケカンバが生育している。

第2層(亜高木層)にはオオカメノキが被度4で一番多い。あいた所にはミネカエデ、ナナカマド、コシアブラ、ツノハシバミなどが少し生育している。

第3層(低木層)にはチシマザサ(コンセイザサ)が非常に元気よく生育していて、被度5である。少し空間があるとアカミノイヌツゲ、ウラジロヨウラク、ミネカエデ、タムシバ、マルバマンサクなどが少し生育している。

第4層(草本層)にはミツバオウレン、ホソバトウゲシバ、ツバメオモト、ゴゼンタチバナ、タケシマラン、ツクバネソウ、ノリウツギなどがどこでもよく生育していた。

このアオモリトドマツ林は尾根にはほとんどなく、少しくぼんだ所にあること、尾根にあっても先端が枯れていること、枝が一般に南東によくしげっていることなどから、冬の季節風がこの林を大きく左右しているらしい。

5. ブナ林の植物

福井県でブナの原生林の一番多いのが赤兎山附近である。この赤兎山周囲でも特に多いのは小原峠の石川県側と鳩ヶ湯登山道に多い。この両者のブナ林の組成はほぼ同じである。

第1層はブナが90%以上被いつくしているので樹間はうす暗くなっている。第1層を作っているブナは高さが約18m近くで、太さは直径60cm以上の大木ばかりで、多くの着生植物をつけている。ナガオノキシノブ、ヤシャビシヤクなどが木のくぼみに生えている。時々スギラン、ツリシユウランなどの珍品も採集することができる。

第2層には、オオカメノキ、ハウチワカエデ、ブナ、コシアブラ、コミネカエデ、オオバクロモジ、タムシバなどが、第1層と分かれて生育しているがその被度は小さく元気がない。やはり第1

層が日光を吸収してしまったからであろう。

第3層にはチシマザサが一番多く生育している。時に第1層のブナの樹冠があいている所ほど、より多くのチシマザサが生育している。チシマザサとチシマザサの間には、少しではあるがノリウツギ、オオカメノキ、オオバクロモジ、ハウチワカエデなどがどこでもよく生育している。第3層は第2層よりも多くの植物が生育していた。

第4層にはシラネウラボトとかシノブカグマが多く生育している。シダ類以外としてはツタウルシ、ヒメモチ、オオバユキザサ、マイズルソウ、ツバメオモト、ミヤマカンスゲなどが多く生育している。

ブナ林は赤兎山の各植物群落の中で一番階層構造が明白になっており、林間がきれいである。ブナ林はこの地方では極相林であり、一番自然が保たれているところである。

6. 草原の植物

赤兎山山頂より三ノ峰への登山路を少しくだと大きな平地にでる。この平地には池もあり、山の人々には通称赤池(写真2)とよばれてよく知られている。この池は真夏でも水枯れがなく、池の周辺が高くもりあがり、高層湿原の性格を持っている。この池にはミヤマホタルイ、ミカズキグサなどが周辺に多く生えている。

池の周辺から南側には、低木がありそこにはオオコメツツジ、ハイイヌツゲ、アカミノイヌツゲなどが列状に群生している。その平地を少し南側に下るとニッコウキスゲ、ノガリヤス、タテヤマスゲなどが生えている草原が山頂から広がっている。梅雨の頃になるとニッコウキスゲ(写真3)の花で全面が真黄になって実に美しい。この草原の少しへこんだ所にはイワイチョウやミズゴケが生育している。

この草原の形成は、風と雪が主要因と考えられる。それは、5月上旬の早春期に登ってみると、この草原の場所に多くの残雪を残していたことから、いわゆる雪田草原と考えられる。

以上、赤兎山の植物の概略であるが、今後、もっと深く研究していきたいと思っている。本調査に指導および協力して下さった、松村敬二・斉藤寛昭・渡辺定路・石本昭司・北川博正の各先生に厚く御礼申し上げる。

勝山市成器西小学校教諭